

# 「ビオトープ通信」へようこそ

## ビオトープ通信 No.11 2002.1

発行／ふるさとハウス・ビオトープ 編集・執筆／丸田真里子

### <目次>

- 7年が経ちました
- 雑感
- 西暦2000年のできごとアレコレ
- 私ごと……真里子編
- 私ごと……BEN編
- リンゴの木のオーナーだより
- 味噌作りのお知らせ
- 手造り醤油について



▲仲良く? 食事をするヒコとウコッケイ

年があらたまり、すでに10日が経っている。今号を作成するに当たり前号を読み返してみる。ビオトープ通信の編集に取り掛かれないうる日々を悶々と過ごし、二度も夢を見るほど気にしていた。それなのにどうだろう、今年は1月10日になっても呆れるほど堂々としている。もはや私には殊勝な気持ちもしおらしさもなくなってしまったのだろうか。我ながら厚顔無恥さに嫌気さえ感じる。傍でBENさんが「そうだ、そうだ、全くその通りだ」と頷いている。毎年こんなことを繰り返しては弁解の余地もない。もはや開き直るしかない。

さて、皆様は、新しい年、2002年をどのようにお迎えになられたでしょうか。ビオトープは9名の若いお客様たちと雪の中で賑やかに新年を迎えました。大晦日の夜は、お客様のピアノの生演奏を聴きながら厳かにも和氣満々と過ごしたのです。毎年、新年を迎えると、昨年はいかなる年であったか、反省をしたり、思い出し笑いをしたり、今年はどんな年にしようかと抱負を語ったりするのだが、今年はビオトープの7年間に思いを馳せてみた。

7年の間に一体、幾人の方がこのビオトープを利用して下さり、幾人の方々と出会ったのだろうか。正確な数は分からないが、おそらく民宿という仕事をしなかったら

出会えなかつたら多くの人たちにお会いしている。数だけでなく内容的にも幅広い年齢層の、様々な分野の方たちとの出会いが、このビオトープで繰り広げられた。

賑やかだった今年の正月も5日を過ぎた夜、静かになった建物の中を歩いて、見回してみる。玄関に入るとリンゴの切り株で造ったリンゴのオブジェが、まず目に入る。廊下の壁、喫茶室の壁や飾り棚は、お客さまから戴いた絵画や書、置物やパッチワークの布などが所狭しと置かれ、飾られている。それら一つ一つに目をやり、手にとって見ると、改めていろいろな多くの思い出がジワリジワリとあふれて来る。そうだ、ビオトープは誰のものでもない、皆様とともに築き上げてきた「みんなの場所」なんだ、それをしみじみと実感する。

もし私がビオトープの七年間を漢字一文字で表すとすれば、希望もこめて「築」と「再」がぴったりだなと思う。民宿ビオトープをオープンしてから、私たち夫婦は沢山の懐かしい友人や知人との再会を果たした。これからは彼女や彼らと良い関係を築いていきたいと願っている。そしてお客様に再び来ていただけるようなおもてなし、これがこれからの私の第一の目標でもある。オープンして七年が経ち、そんな事を私はもっと深く考えたいと思っている。

## 西暦2001年のできごとアレコレ

### <雑感>

情けないが、とうとう年1回の発行に成り下がってしまった「ピオトープ通信」である。

それだけに何とか多くの方に読んでいただける通信したいと思い、せめて心に共鳴し、心に残る言葉で飾ってみようと元日の新聞に目を通し、探してみた。残念ながら私の心を揺さぶる言葉も文章も見出せなかった。

それでも、昨年末だったかの新聞で目にしたある言葉をふと思い出した。「シンパシー」という言葉である。広辞苑で調べると「同情。同感。共感。共鳴」との解説があった。また「シンパサイザー或はシンパ」は「同情者。共鳴者。特に共産主義運動を支援する人」とあった。目にした新聞には、シンパシーにはもともと「痛みを分かち合う」という意味があって…と書かれていた。昨年は何度も目にし、耳にした「痛み」という言葉だが、現実に痛みを分かち合うことなんかできるのだろうか。私個人に問うてみても自信がない。もし出来るとして一体どの範囲の人たちやモノたちとできるだろう。家族、親族、近所、地域、町、村、国、世界、地球、宇宙。個人が所属する場所は果てしなく広がっていく。こういったことを日々の暮らしの中でどう考えればいいのだろう。

折しも昨年9月、アメリカで起きた同時多発テロは世界の人たちに鋭く、深く、多くの課題を投げかけた。そして様々な分野でこの問題を軸に解説、分析しているのを情報として得た。が、私はやっぱり個人の暮らしの中で、得た情報をどうすればよいのか戸惑うばかりだ。そんな私だが、1月6日付けの新聞に文豪・夏目漱石が小説「こころ」に述べている一フレーズが掲載されていた。それを紹介して今号のこの欄を締めよう。

「私は今より一層さびしい未来の私を我慢する代わりに、さびしい今の私を我慢したいのです」

### ♪今年もライブ♪

2000年の夏の暑さをぶっ飛ばしてくれた北海道のミュージシャンが2001年の夏もやってきた。ジャングル（グループ）からソロ活動を始めた武田英祐一（えいすけいち）君と瀬戸口正樹君の二人だ。英祐一君の歌に関しては昨年のライブから一年間に彼のCDを聴きまくって、私（M）は惚れ込んでしまっていた。先ず、声がいい。かなり高めの声で、それに加えて歌の詩が素晴らしい。彼の自作の詩はとて二十歳過ぎの青年が作ったとは思えないほどに人生の、また人の心の機微に触れたものである。私としては「フン、若いやつが、生意気に、くやしい」というのが本音。好みの問題もあるだろうが、できれば多くの人に聴いてもらいたい、と思っているのも本音だ。

実は、彼の歌は昨年製作されたオーナー・BENの脚本・監督のビデオドラマ「DONGURI・権兵衛さんの出発」（詳しくは別欄）の挿入歌としても使われた。また2002年1月3日に行われた小川村の成人式の記念行事でも彼は歌い、38名の新成人を魅了したのだ。

ピオトープの喫茶室はこれから、ジャンルに関係なく多くの方に利用していただこうと考えている。今までもフルートやバイオリンやコントラバスなどの楽器をお持ちになって宿泊に利用して下さるお客様がいましたが、大・大・大歓迎。

彼女たちは今、どんな感想を持っているのかな。後日、送ってくださった全員の感想文集ではとても喜んでいますが、真の交流はこれからだと思います。彼女たちが「おじさん、真里子さん、おばあちゃん、また来たよ」って気軽に訪ねて来てくれるよう、私たちも大いに努めなくてはなりません。



## 畑から…厨房から…食卓から

### ♪素敵な出会いが…♪

夏よりピオトープの喫茶室に素敵な仲間が加わった。ステンドグラスの綺麗な万華鏡である。万華鏡、といえは円筒状、千代紙、クルクル回す…というイメージしかなかったのだが、それは四角形の箱型で、しかもステンドグラス。恐る恐る手にして見るとずっしりと重い。覗くと「・・・キレイ！」「光に向けて覗けばもっときれいよ」の製作者の声に従ってライトに向けた。「どう?」「・・・」「ここに置いて行きましょうか」「いいんですか」その日から万華鏡は喫茶室のテーブルの上に貴婦人のごとく美しく座っている。

万華鏡の製作者である中村和正・ミエ子さんご夫妻は、小川村埋牧地区に家を新築し、神奈川県相模原より越してこられた。「万華鏡協会というのがあってね、趣味でやっているんです」と言うご夫妻にお話を伺うと、ほかにユニークな形をした万華鏡がいろいろあるようだ。万華鏡という名の通り、話に沢山の花が咲き、ドンドン広がっていく。それに話せば話すほど奥がとて深そうだ。

ピオトープを訪ねてこられたら、先ず中村ご夫妻作の万華鏡を手にして下さい。



2001年の夏も「ゴーヤ」と「ズッキーニ」がピオトープの畑の主役となった。どちらも長期間にわたり、且つ大量に収穫ができ、料理担当の私を楽しませてくれ、お客様にも喜んでいただけただけのこと何より嬉しいことだった。特にゴーヤはNHKの連続TV小説「ちゅらさん」のお陰で多くの人に知られ、ゴーヤ料理も皆さんのお口に違和感なく受け入れられたし、子供達にも「ゴーヤマンだ」と喜んでもらえた。

それとゴーヤもズッキーニも魅力は料理だけでないことを発見した。一度ピオトープの畑にご案内したい。あの巨大なズッキーニがどのように育っているか、ゴーヤがどのように花をつけ実へと成長していくかを知ってもらえば、きっと今以上に料理だって楽しんでもらえるに違いない。よし、2002年の課題ができた。できうる限り畑にご案内して、畑ごとピオトープの「料理」にしよう。特にゴーヤの畑に行くとさっぱりとしたいい香りがする。ゴーヤの傍にただで健康になるような気さえする。なんでも沖縄の人は葉っぱをガーゼに包んでお風呂に入れてアセモの予防に役立っているとか。

秋には仲間と作っているソバや大豆の収穫があった。ソバを作って3年目になるが、鉄工所を営んでいる仲間が工夫して作った電動仕掛けの石臼で挽く。挽く作業を自分でやってみて大変に根気の要る仕事であることが判った。挽き立てのそば粉で作ったそばがきほもっちりとして香りも良くて最高。皆さん、一度はご賞味あれ。その他に辛味大根も作った。そして昨年、ピオトープで話題になった緑色鮮やかなビタミン大根も作ったことはいうまでもない。今年もお客様に「これ、なんだ?」と尋ねてはほくそえんでいる二人である。

そしてピオトープで自慢できるのは、何ととっても味噌である。材料の大豆は仲間と作ったもの、塩は岩塩を使用している。大豆は大きな釜で薪を燃やして煮る。

左の写真は、昨年の味噌作り風景。煮て潰した大豆と米糀と岩塩とを混ぜ合わせているところ。皆の顔が楽しそうなのはこの作業がまさに泥遊びだからだ。以前、味噌作りを体験した男の子が1年後に訪ねて来たとき「これ僕が作った味噌だよ」と嬉しそうに味噌汁を食べてたなあ。

## 私ごと…真里子編

### ● 三つの再会劇ノ巻 ●

何度かこの通信でもお話しましたが、民宿をオープンして予想もしていなかった嬉しい出来事は懐かしい友人や知人たちとの再会が多くなったこと。2001年も、昔の仕事仲間、大学時代のサークルの仲間、大学時代にすんでいたアパートでの友人夫婦が、相次いで訪ねて来て下さって、歓声と涙と笑い声に満ち満ちた再会劇の嵐が私を1年に三度も襲ったのです。彼ら、彼女らとこれからどのようなお付き合いへと発展していくか、楽しみが増えました。もしかしたら、久々に胸ときめくような・・・ことも・・・ね。

この話をある人にしたら「大学時代のサークルって何？」と訊かれた。信じてもらえるかな・・・実は・・・「航空部」。信じられないよね！「航空部」の仲間との再会の橋渡しとなったのは、大学時代の友人でもある歌人の道浦母都子さんが、四年前の春に日経新聞に書いたエッセイでした。それを読んだ仲間の一人が・・・。彼らとの再会までの道程を話すと長くなってしまうので「つづく」にして次号でゆっくり話しましょう。その後、仲間の一人が管理しているホームページを通して楽しいお付き合いが続いていることだけをお話して。

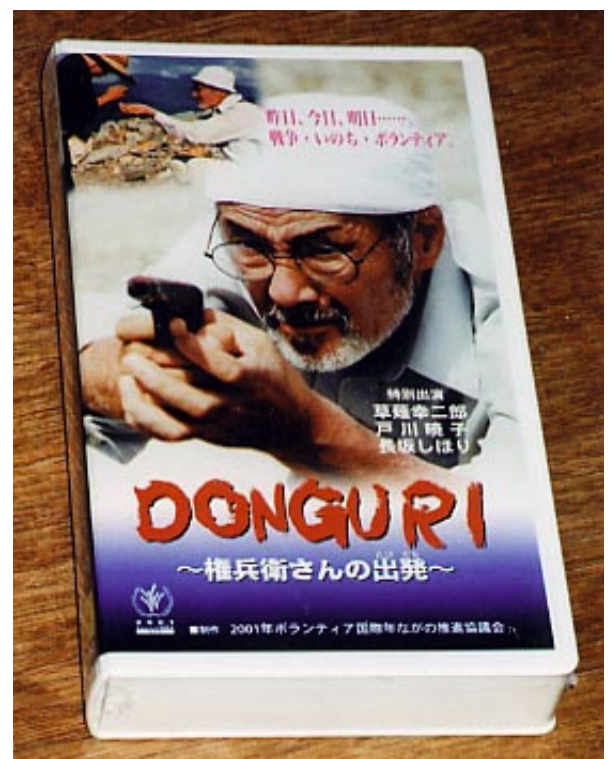
いずれにしても旧友から「万波！」「万波さん」と旧姓で呼ばれるのは何ともいえず心地よいものでした。久々に胸がキュンとなりました。

## 私ごと…B E N 編

B E Nにとって2001年はビデオドラマ作りのボランティアに明け暮れた年でした。

そのビデオドラマ「DONGURI・権兵衛さんの出発(たびだち)」(90分)は2001年ボランティア国際年ながの推進協議会の制作によるもので、昨年末に完成しました。B E Nは脚本・監督として参加しています。

ガンを宣告され余命いくばくもない老人と若者たちの出会いを通して、いのち、戦争、ボランティアなどをテーマにしたドラマです。主演は俳優・草薙幸次郎さんですが、ほとんどのスタッフ・キャストは一般公募で参加した人たちです。一人でも多くの方々に見ていただきたいと願っています。ビデオパッケージでも大型スクリーンでご覧いただけます。また出張上映会、テレビ放映も計画しています。ビデオパッケージとしても販売します(3,500円)。詳しくはビデオトープにお問合せ下さい。



## リンゴの木のオーナーだより

●オーナーの皆様、1年間ご苦労様でした。

新しいオーナーの方、一本のリンゴのオーナーになられて楽しんでいただけましたでしょうか。収穫後「とても美味しいリンゴでした」「来年もお願いします」とお便りを寄せてくださりましてありがとうございます。農家の方も皆さんが喜んでおられることを嬉しく思っておられます。もっともっと農家の方とお話する時間を設けなくてはと考えていますが。

2001年は夏に十分な雨が降らず、全般的に実がこぶりだったようです。私共は管理を任されたリンゴを「販売する」ことを初めて経験しました。剪定に始まっては花摘み、摘果、消毒、草刈り、葉摘み、玉回し、収穫、選果、箱詰め、発送・・・頭では大変な仕事とわかっているも予想以上の苦労でした。一本のリンゴの木を育て、次年に繋げ、継承していく仕事は子供を育てることに通じると実感しました。農家の方から「何度も足を運ぶことが一番大切だよ」と教わったよ、と話してくださったオーナーの方もいました。遠くで何度も来られないでしょうが、雨が降った日、風が吹いたとき、リンゴはどうしてるかな、といつも心にかけていてください。

オーナー制も好評で新しく登録を希望される方が増えていますが、現時点では新規登録は打ち切らせていただいております。何卒ご了承ください。

今年も美味しいリンゴが沢山採れますようにお祈りいたします。

発行：ふるさとハウス・ビオトープ

編集：丸田 真里子

〒381-3304 長野県上水内郡小川村大字瀬戸川(成就)字酒盛場909

TEL.026-269-3675 FAX.026-269-3391

E-mail [biotop@gem.hi-ho.ne.jp](mailto:biotop@gem.hi-ho.ne.jp)

URL <http://www.gem.hi-ho.ne.jp/biotop/>